鷗外
荷風
万太郎

小島政二郎

鷗外荷風万太郎

小島政二郎

文藝春秋新社

鷗外荷風万太郎 奥付

昭和四〇年九月五日　第一刷

定価　四八〇円

著　者　小島政二郎

発行者　上林吾郎

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四

印刷所　大日本印刷

製本所　中島製本

＊乱丁落丁のものはお取替えいたします

© 1965 Masajiro Kojima　　Printed in Japan

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芥川龍之介 5
森鷗外 73
鈴木三重吉 121
永井荷風 185
久保田万太郎 239

装釘
小島美籠
岡部瓔子

鷗外　荷風　万太郎

芥川龍之介

一

七月二十四日――偶然私は芥川龍之介の命日に、この小説を書き始めている。

芥川さんが自殺した日は、煮え返るような暑い日で、その後芥川さんの忌日というと、毎年我慢のならないような暑い日が続いた。

それが、どういう訳か、戦後のこの日は毎年不思議に涼しい。今年も、涼しくって芥川さんの命日らしくなかった。

死後、おかあさんにお目に掛かったら、

「僕は一番暑い日に死んで、みんなを困らしてやるんだ」

と、冗談のようにそう言っていたという話を聞いて、私たちは思わず悲しいニガ笑いをした。そのくらい来る年も来る年も、河童忌(かっぱき)というと蒸風呂(むしぶろ)にはいったように暑かった。

なぜこんなことを書くのだろう。自分にも分らない。しかし、恐らくこんな暑ささえ、今となってはなつかしいのだろう。久保田万太郎の和歌に、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鎌倉の春の日浴びて思ふこと鷗外よりも我老いしかな

鷗外は六十、龍之介は三十六でこの世を去った。万太郎流にいえば、私もいつの間にか龍之介よりも生き伸びてしまった。私はある文章に、

この書簡は芥川龍之介の真筆なり。今より二十年ばかり前、一ト夏家族と共に暑を常陸の国大洗に避けし時、留守を一青年に預けたるところ、その青年悪心をおこしてわが秘蔵するこの先輩の消息若干を盗みいだしたることあり。これはその一つなり。今遠く岩代の国須賀川に来たりて再びこの手札に見えんとは——。一読、故人の謦咳に接する思ひあり。眼中の人は常に若く、我は徒らに塵労のうちに老いたり。嗚呼。

と書いたが、いまだに私は、いろんな点で三十六の芥川さんに及ばざることを思わずにいられない。芥川さんの親友は、菊池寛にしても、久米正雄にしても、みんな割に早死にをした。僅かに生き残ったのは、佐佐木茂索と、瀧井孝作と、私と、たった三人になってしまった。そういう私たちには、彼が自殺した日の暑かったことすら今はなつかしいのである。

私は、本当をいうと、その日は東京にいないはずだった。琵琶湖の遊覧船の上で夏季大学があり、その講師に招かれて前の日に出発しているはずだった。それが、どういう訳か、とにかく日延べになったらしく、家にいた。

知らせを受けると、私は人力車を飛ばして田端四三五の芥川家へ駆け付けた。

二

芥川家は高台にあって、椎朱家とか、香取家とか言うような名家が並んだ静かな一廓にあった。高い板塀を巡らした、庭の広い、いわゆるお屋敷だった。坂をおりたところに、岩田専太郎のアトリエがあり、別の坂をおりると、木立ちの深い天然自笑軒という古風な懐石茶屋があった。

敷石を踏んで行くと、静かな格子戸にぶつかる。そこに時々「忙中謝客」と筆で書いた札がぶらさがっていた。左の隅の方に小さく「親父にあらず、せがれなり」と註が加えてあった。

上がると、二畳か三畳の小部屋があって、すぐそこから二階へ上がる梯子段になっていた。上がったところが廊下、左に十畳ぐらいの書斎があり、右に長六畳の部屋があった。

書斎の真下に、同じくらいの広さの座敷があり、そこに漱石の「風月相知」という額が掛かっていた。書斎には、初め菅虎雄筆の「我鬼窟」、後には下村空谷筆の「澄江堂」という額が掛かっていた。

額が変った時、佐佐木茂索が、

「澄江という人が新らしくできたんじゃないんですか」

と、それが癖の唇をまげて冗談を言った。そのころ、二人はよく私を撒いてどこかへ遊びに行っていた。

芥川家には「壺天閑」という、これは木彫りのいい額があったが、あれはどこに掛かっていたのだったろうか。

書斎には、万巻の書が書棚に並び、はいり切れない本は畳の上にキチンと積み重ねてあった。大きな額縁にはいったレンブラントの複製なども、立て掛けてあった。

芥川さんの坐っているうしろに、違い棚のような床の間があって、そこには水墨の絵や、小さな

彫刻などが置かれていた。
書斎の真中よりもやや違い棚風の床の間寄りに、絨毯が一枚敷いてあって、漱石が結婚のお祝いに買ってくれたという小振りな紫檀の机が据えてあった。芥川さんが坐った左側に、これも小振りの長火鉢、その上に鉄瓶。
私も、佐佐木も、瀧井も、まだ一人者で文壇に出られないでいた。
「僕は徹夜をして一ト晩で書いてしまわないとイヤになるんだ」
佐佐木はそう言って、一ト晩で三十枚ぐらいの短篇は書き上げてしまうらしかった。そういう作品を持ってきて、芥川さんに読んでもらっていた。
瀧井は筆が遅く、書けただけを持ってきていた。芥川さんの面会日は実に楽しかった。新聞雑誌の人が来る、出版社の人が来る、友だちが来る。その中には、谷崎潤一郎や久米正雄、菊池寛、江口渙、私は会わなかったが、久保田万太郎、室生犀星、萩原朔太郎、佐藤春夫など、その他大勢。若い学者や、思い掛けない江戸八という名の羽子板を作る職人などもきた。女のお客も少なくなかった。
とにかく客は千差万別だったが、相手変れど主変らずで、芥川さんは一人でこれらの客の相手をして、それぞれ話題を変えてみんなに満足を与えて帰す努力は大変なことだったろう。東京の下町生れの人の、これが客を遇する道と心得ていたのだろう。
芥川さんの書斎にいると、文壇の事情が手に取るように分って、文学青年の私たちにはウズウズするくらい面白かった。私たち定連だけになると、芥川さんは気を許して、和漢洋にわたる該博な

面白い話を聞かしてくれた。

ベートーヴェンがツンボになる前後の話、ツンボになったのを知らずにいて、公開の席で失敗を演じて絶望のドン底に陥る話、ところが、ツンボになってから本当にすぐれた作品を生むに至る話。

レンブラントの話、人気の絶頂にいた彼が、「夜警」で分らず屋の町の有力者の怒りを買って、だんだん世の中から捨てられて行く話、恋女房のサスキアと二人で貧乏の中で豊かに暮らす話、美しい貴族の娘のサスキアを膝に乗せた自画像を書いた彼、結婚後三年目に、妻を画布の上で裸にした彼、ジュピターの訪れをダナエに扮した彼女が、豊かな裸身をよじり、目に見えぬ天の客にほのかな媚を送っている、その輝くばかりの美しい肉体。

十八年の間、天才——荒ぶる神との生活に疲れ果ててサスキアは死んで行く。彼のなすこと言うことのすべてが、当時のオランダの社会常識と相容れず、天才はいつの世にも理解されにくいが、殊に彼の絵を正しく鑑賞できる人が当時のオランダにはいなかった。そのために彼の絵は売れず、年を取るに従って彼は貧苦の中に置き去りにされて行く話。

そういう貧しさと無理解の中で、彼は却って次々と大作を書いて行った話。そういう芥川さんの話は私たちを興奮させずに置かなかった。

ストリンドベルヒのような文豪でも、年を取るにつれて、ラゲルレフ程度の作家に人気を奪われて行く話。今では日本訳まであるが、そのころは誰も知らなかった支那の「聊斎志異」を読んでいて、芥川さんはその中の話を幾つか聞かせてくれた。漢詩の話。支那の風俗の話。

日本の古典の話。そのころは、すぐれた鑑賞眼を持った藤岡作太郎博士でさえ、「今昔物語」を尾

大な短篇小説集としては認めていなかった。その「今昔物語」に最高の文学的価値を見いだした最初の人は芥川龍之介だった。

そういう新鮮な目で見たわが国の古典の話が彼の口を突いて出た。相手によっては、ゲーテの話、ニーチェの話、ショーペンハウエルの話、そういう哲学の話も出た。イギリス文学の話、アメリカ文学の話、フランス文学、ドイツ文学の話、文学、絵画、音楽の話、詩の話、和歌俳句の話、書の話、相手によって世界中のことが彼の話題に登った。

その合間合間には、西洋の印税の話、原稿料の話。突如として下賤な女の話になるかと思えば、文壇のゴシップに一座がにぎわったりもした。

秦豊吉と絶交した話、文壇三吝嗇の話、谷崎潤一郎の食欲の話、彼が支那料理を食べる時の仕方話、夏目漱石の不機嫌な時の話、森鷗外の葉巻の話、正宗白鳥の話し好きな話、どれも面白かった。芥川さんは話がうまいから、殊に面白かった。

時には、永井荷風とか、志賀直哉とか、武者小路とか、その他いろんな作家の評、その月の雑誌に発表された小説の読後感などが彼の口を突いて出る時は、一段と面白かった。思わず私たちは聞き耳を立てた。

彼は意外に永井荷風の小説を認めていなかった。荷風を崇拝して慶応義塾へ入学した私は、はなはだ不服で、大いに反駁を試みたが、議論ではてんで歯が立たなかった。

「僕らの中では、久米が一番豊かな鑑賞力を持っているね」

彼はそう言っていたが、自分自身の鑑賞眼にも自信を持っていた。

「自分の好みを捨てなければね。できるだけ自分を空しくして、相手の言いなりになって、あちらさまの連れて行くところへどこまでも連れて行かれなければ——。そうして相手が君を放した時、水面に浮び上がって、今度は君の持っているあらゆる知識、才能、感情、感覚を働かして、相手の体内で味わってきたすべての物を吟味するのが鑑賞だ」

彼はそういう風にして私たちを啓発してくれた。私は彼のお蔭で武者小路の文学の心髄を理解させてもらった。

とにかく、彼のようなズバ抜けてすぐれた人間に会ったのは生れて初めてだった。彼はいい目をしていた。いい顔をしていた。聰明に澄み返ったような目と顔をしていた。その上、やさしい親切な心を持っていた。皮肉な、いたずらッ子でもあったが——

議論をしても、菊池寛や久米正雄は、情容赦もなくバラリズンとこっちの骨まで切りおろして来るが、芥川はサッと太刀を振りかぶっては見せるが、それだけで、こっちの息の根までは留めはしなかった。

私は澄江堂の書斎で、大学以上の教育を受けた。

彼は、なんと言っても、作家としては志賀直哉を最も尊敬していた。傍若無人な逞しい生活振りでは、菊池寛に舌を巻いていた。彼は書くのが遅く、一ト晩徹夜をして三枚書ければいい方だった。毎日、朝のうちに必ず十二枚は書く室生犀星のことをよく話題にした。

「志賀さんは書いていて、文章に調子が付き出すと机の前から立って、書斎の中をあっちこっちと歩くんだそうだ。そうして体から調子を洗い落してから、また机に向う」

感嘆の調子を込めてそういう話をした。

「僕なんか文章に調子が付くのを待っているようなものだからね。調子が付くと、この時とばかり一枚でも余計に書こうとする」

調子で書く自身に彼は手綱を嚙ませようとしていた。こういう微妙なことは、その時の私にはまだよく分らなかった。なぜ調子に乗って書いては悪いのか、なぜ志賀さんのやり方がいいのか——

そのころの私は、格調の正しい鷗外の文章が一番好きだった。しかし、小説の文章としては徳田秋聲の文章の方がもっとふさわしいのではないかと思っていた。

この方は、廣津和郎のいう人生に一番近い散文らしい散文だった。これが小説の文体だと思いながら、私にはマネのできない文章だとあきらめていた。あきらめながらも、心を引かれた。

と言って、鷗外の文章も、私にマネのできる文章ではなかった。しかし、美しいスタイルのある文章だった。芥川の文章も、漱石の弟子でありながら、文章の上では——いや、短篇小説の手法の上でも、鷗外の筋を引いていると言った方がいいだろう。とにかく、私は彼の「羅生門」「孤独地獄」「父」「酒虫」「偸盗」を経て、「或日の大石内蔵助」に至って崇拝の域にまで達した。鈴木三重吉の紹介状を持って尋ねて行ったのが、彼と会った最初だった。芥川が文子さんと結婚した翌日だと彼は言った。

そのころ、彼は横須賀の海軍機関学校の教官をしていて、鎌倉に住んでいた。私はそこへも遊びに行った。久米正雄など七八人で、俳句を作って一ト晩愉快に過ごしたこともあった。

彼は新進作家で、同時に流行作家で、華々しい存在だった。そうしたある日、彼は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com